

基盤教育科目「アフリカ学入門」(アクティブ・ラーニング開発支援経費採択科目)

授業担当者：阪本公美子(国際学部 国際社会学科 准教授)

公開授業：平成 28 年 6 月 15 日(水) 10:30~12:00 場所：4B51 参加者：18 人

公開検討会：平成 28 年 7 月 11 日(月) 14:50~15:50 場所：4B44 参加者：10 人

●「アフリカ学入門」におけるアクティブ・ラーニング

「アフリカ学入門」は今年度新たに開設された基盤教育科目(社会科学系)です。これまで国際学部の専門科目として開講されてきた「アフリカ論」をベースとして、国際学部以外の学生にもアフリカの多様な状況について等身大に学べる授業となっています。

「アフリカ学入門」における主な活動は次の5つです。

1. ゲスト・スピーカーによる講義
2. タンザニア農村ロールプレー ～水汲み・脱穀・家族会議体験～
3. アフリカ料理・音楽の体験
4. アフリカン・フェスティバルへの参加
5. アフリカからの留学生との交流

その他にも「プチ・アクティブ・ラーニング」として、様々な工夫が実施されていました。例えば、オリエンテーションにおける国クイズ、グループワークを活かした国調べ(くじで担当国を決定→各自で国について調べ→地域別・気候別グループにて共有→発表)、宿題やレポートにコメントを付与して返却、授業終わりのミニツッペーパー、実物を見せる・使わせる、写真やビデオ教材の活用などがあげられます。

① ゲスト・スピーカーによる講義(公開授業)

公開授業ではゲスト・スピーカーによる講義が行われました。テーマは「農業と食に関する支援と投資を考える～モザンビーク、プロサバンナの事例から」ということで、実際にアフリカで活動を行っている方を招待しての授業となりました。ゲスト・スピーカーをお呼びするにあたって、あらかじめ受講生はこのテーマに関して事前学習を行っており、関連する資料を分担して読み、論点・疑問点の抽出を行ってきました。

ゲスト・スピーカーによる講義当日は、50分ほどの講義の後、グループごとに質問を行いました。ゲスト講師にはあらかじめ事前学習で抽出した論点・疑問点が伝えられており、短い時間の間にも深い議論を可能としていました。

② タンザニア農村におけるロールプレー ～水汲み・脱穀・家族会議体験～

第6、7回目の授業では、タンザニア南東部農村の背景や男女分業について実感するため、ロールプレーが活用されていました。具体的なプロフィールが書かれたロール・カードを引き、家族(金持商人家族、堅実農家家族、農民家族、女性世帯主世帯など)ごとに分かれ、第6回の授業では女性のロールの受講生を中心に、水汲みと脱穀を体験し、第7回の授業では、村における課題をもとに、家族会議、村会議をロールプレーしました。

③ アフリカ料理・音楽の体験

第10～12回の授業では、アフリカ料理を作る、アフリカの楽器を演奏するなど、実際にアフリカ文化に触れる機会が設けられています。料理に使う材料はタンザニアから持ち帰るなど本格的なもので、当日はアフリカからの留学生を招待し、交流会を行いました。

④ 外部イベント（アフリカン・フェスティバル）への参加

アフリカに関連した外部イベント（アフリカン・フェスティバル）にも授業の一環として参加を促していました。関心テーマごとにグループを編成し、各グループにはアフリカの留学生・経験者を引率者として配置し、当日はグループごとに行動しました。また、このグループで、最終回にプレゼンテーションを行いました。

⑤ アフリカからの留学生との交流

全体を通して TA としてアフリカからの留学生である大学院生を配置するほか、意識的にアフリカの留学生と触れ合う機会を設けていました。この背景には、学生から「実際にアフリカの人と話したい」という希望が中間アンケートで出てきたということがあります。留学生との交流は教育的効果が高いと感じたため、可能な限り今後も続けていきたいとのことです。

●公開検討会における論点(抜粋)

公開検討会ではまず阪本先生より授業の概要説明と中間アンケートの報告、そしてアクティブ・ラーニングについての考察と問題提起がなされました。

中間アンケートでは、授業内容を分割し（時系列、講義・グループ・アクティビティなど）、「アフリカに関する学習意欲を刺激し、理解を促進したかどうか」という視点に基づいて、5段階評価を行っていました。その結果、実際にアクティブ・ラーニングを取り入れた活動は評価点が高いという結果が出ていることが報告されました。

ただし、問題解決的思考を行うためには知識習得も重要であるということ、派手なアクティブ・ラーニングは確かに学生からの評判は良いが持続可能性（賃金・労力）という点に問題を抱えていること、またお膳立てされたアクティブ・ラーニングをどう越えていくことができるのかといった問題提起がなされました。

参加者からは、授業の特性に応じたアクティブ・ラーニングを考える必要があるのではないかという論点が出されました。例えば、選択科目と必修科目では学生のモチベーションが異なることや、大人数授業では対一の対応が難しいという声があがり、参加者自身が担当されている授業の例を話すなど、互いの情報・意見交換の場となりました。



[公開検討会の様子]

(文責：基盤教育センター 竹井沙織)